

何かが後ろを
つけてくる

ヨコテ

初秋の日曜日の夕方――

カーテンの隙間から差す西日でハッと我に返り、永瀬は飛び跳ねて由香里の躰から離れた。すでに事切れている由香里の躰が目の前の、フローリングの床に横たわっている。長い髪を床に広げ、恨みがましい目を中空に向けている。永瀬は思わず顔をそむけた。こんなことになるとは思ってもみなかった。何が切っ掛けでこうなったのか――いつの間にか別れ話をしている、気がついたら由香里を押し倒し、首を絞めていた。

急いで由香里のマンションを飛び出し、顔を見られないようにして駅への通りを早足で歩く。幸いなことに、マンションでも駅への通りでも不審に思われることはなかった。電車に乗り込むと、永瀬は少しだけ鼓動が鎮まるのを感じた。いつもなら混んでいる車両を不快に思うのだが、日常の、ありふれた現実の世界に戻ってきたような安心感があった。

永瀬が由香里と知り合ったのは二年前の春だった。会社の同僚たちと居酒屋でおだを上げていると、空いていた隣のテーブルに三人組の女の子が座った。若い男女のグループが一つになって飲み始めるのに時間は掛からず、自己紹介が済むと、永瀬は隣のテーブルの一番近くに座っていた女の子と話を始めた。それが由香里だった。最初は積極的に話し掛ける永瀬に緊張を見せていた由香里だったが、次第に慣れてきて冗談も交わすようになり、帰りしなにふたりはメールのアドレスを交換した。

ふたりの交際は順調だった。休日にはデートを重ね、お互いのマンションを行き来し、永瀬はさして不満など持っていなかった。最初に影が差したのは二ヶ月前だった。それまで一度もしたことがない結婚の話を由香里がした。永瀬もそのことが念頭にない訳ではなかったが、まだ先だと思っていた。まだ早い、と言って永瀬が話を逸らしても、会う度に由香里は結婚の話を口にした。

口約束でもいいからと、由香里は永瀬の言質を取ろうと必死だった。しかし、結婚ともなれば慎重にならざるを得ず、永瀬は由香里への返事を延ばした。ふたつ年上の由香里はお姉さん気取りで、嫌じゃないのなら任せてもらうわ、と勝手に話を進めようとした。癪だった。自分の優柔不断を馬鹿にされたようでもあり、結婚前から主導権を握ろうとする由香里に腹が立った。それで別れ話をした。本気ではなかったが、次第に本気の口論になり、ついに手を掛けてしまった――。

自分のマンションに戻ってひとりになった永瀬は、悪夢を見ていたような気がしてきて、由香里が死んだのは夢だったのではないか、と思いたかった。だが、手には由香里の首の感触が残っていて、現実を認めない訳にはいかなかった。

冷静になろうとソファに腰を下ろし、腕を組む。

まず、永瀬は自首を考えた。由香里の交際相手が自分だということは友人たちも知っていて、由香里の両親にも一度だけ会ったことがある。どう考えても真っ先に疑われるのは永瀬で、シラを切り通すことは出来そうになかった。ならば少しでも罪を軽くしようと考えたが、初犯とはいえ、殺人を犯した者が実刑を食らわないはずがない。永瀬の考えは揺らいだ。

懊悩する永瀬はソファから立ち上がり、部屋の中をうろうろした。それでも、やってしまったことを後悔するだけで、これから何をやったらいいのかの具体的な結論が出せなかった。

今日、由香里のマンションに行ったことは誰も知らないはずだ。そのことがふと永瀬の頭をよぎった。今日の訪問は事前に約束しておらず、ふらりと訪ねて行ったのだから、自分があの部屋にいたことは誰も知らない。一番の容疑者には違いないだろうが、決め手となる証拠は何もない。指紋や毛髪などは何度も訪問しているからあって当然だし、動機となりうる別れ話にしてもまだ誰にも話したことはなく、順調な交際が続いていたと証言すれば疑いは晴れるかもしれない。

永瀬の心は決まった。

今日は具合が悪くて何処にも行かず、一日中この部屋にいた――。

朝のいつもの時刻にマンションを出て、いつもの電車に乗る。始業の十分前に会社に着き、紙コップのコーヒーを持って自分のデスクに座る。ここ何年もそうしてきたように、永瀬は努めていつもと変わらない行動を心掛けた。変に思うものは誰もおらず、少しだけ安堵を覚える。それでもデスクにじっとしていると余計なことを考えそうで、すぐに外出することにした。永瀬は事務用品の会社で営業をしている。コーヒーを飲み干すと、取引先に行ってくると言い、電車に乗った。

取引先のある繁華街をぶらつく。

何の変哲もない日常の光景にいと、昨日の出来事が夢のように思えてならなかった。

携帯を取り出して由香里にメールを打つ。

――昨日は行けなくてごめん。埋め合わせに、今度の休みはドライブに行こうか。何処がいい？

後付けのアリバイだが、少しは役に立ってくれるだろう。シラを切ると決めた以上、有益なことは何であれやっておきたかった。

今頃、由香里の会社では出社しない由香里を訝しく思っているに違いない。無断欠勤の由香里に電話を掛けても由香里が出るはずはなく、そのうち会社の間が様子を見に行くだろう。それはいつだろうか。終業後？ それとも明日？ 遅かれ早かれそのときはやってくる。そして警察に事情を聴かれる。上手く誤魔化せるだろうか。自信がない。どちらかといえば思っていることが顔に出やすいタイプだ。やはり無理だったのかもしれない。だが――もう遅い。今さら自首したところで半日も時間が経っており、また、メールの小細工をしたことで心証が悪いだろう。

このまま誤魔化すしかない。

平静を装って取引先に顔を出し、適当に時間を潰して会社に戻る。日常の自分を演じることに疲れ、気分が悪かった。顔色がよくないという同僚に、風の引き始めかな、と笑って応える。事件が発覚する前に何かを知っていたようだ、と疑われてはならなかった。

退社の時刻になり、永瀬は会社の同僚たちと連れだって会社を出た。外はすでに暗い。一杯やっ払いこうと誘われたが、永瀬は風邪気味だと断った。同僚たちと別れて駅への道を歩いていると、本当に風邪を引いてしまったのか、ゾクゾクと寒気がしてきた。額に手を当ててみたが熱はないようだ。喉も痛くないし、咳も出ない。よく分からないが、帰ったら熱い風呂に入ってさっさと寝よう——永瀬はそう思った。

おかしい。

妙な気配がする。

さっきからずっと誰かにつけられている気がする。

駅までの通りにはそれなりに通行人がおり、誰かが後ろをついてきてもおかしくなかったが、永瀬は異様な気配を感じていた。刺すような視線とでもいうのか、誰かに悪意のこもった目で睨まれている気がした。戸惑いと恐れを抱きつつ、永瀬は振り返った。が、そこには俯きがちに駅へと急ぐサラリーマンがいただけで、怪しい人の姿はなかった。

気のせいかな——。

神経が過敏になりすぎているようだ。そう思い、永瀬は何も考えないようにして電車に乗り込んだ。夕方のラッシュ時で車内は混み合い、押し合いへし合いの中で吊革に掴まる。永瀬はただ漫然と窓の外を眺めた。暗い闇に点在する家々の明かりが流れすぎていく。

見慣れた光景に永瀬は意識を没頭させた。何も考えまい。

併走する車を目で追う。

ビルに掲げられた広告を見る。

滑り込んだ駅の反対ホームを眺める。

駅のホームには人が溢れていて、髪の高い女性の姿が目に入ると、どうしても由香里のことを意識せずにはいられなかった。

もう由香里の死体は発見されただろうか。

今夜中にも警察が事情を聴きにやってくるだろうか。

動き出した車窓の外を眺めながら、永瀬はぼんやりと考えた。

なるようにしかならない。今さら懺悔しても、もう遅い。何も考えまい。

永瀬は溜め息を吐いた。車窓を見やりながら胸中で呟いた。

どうするんだよ、これから。

そのときだった。車窓に白い影が映り、永瀬の後ろを横切った。

「うわっ」

永瀬は思わず大きな声を出してしまった。

一瞬のことで判然としなかったが、長い髪の女だった。混んでいる車内を横切るのは容易ではなく、不可能と言ってもいい。なのに誰かが、あるいは何かが永瀬の後ろを通り過ぎていった。永瀬の悲鳴にも似た大声に、周りの乗客が迷惑そうな目を向ける。だが、そんなものは永瀬の目には見えていなかった。見えたもの——それは由香里に違いなかった。

幻覚だ。そうに決まっている。由香里が見えるはずがない。

自分にそう言い聞かせても、永瀬の震えは止まらなかった。白い影が行った方に目を向けるが、すでに消えたあとだった。いや、そもそも何もなかった、何も――

いつもの駅で降り、マンションへの道を歩く。

考えまいとしてもどうしても考えてしまい、何かが後ろをつけてくる感覚が拭えない。それは右へ行ったり左へ行ったりしながら、つかず離れずひたひたとつけてきている。自転車の倒れる音など、後ろから何かの物音がする度に、永瀬は振り返りたい衝動に駆られた。しかし、怖くて振り返られない。もしすぐ後ろに由香里が立っていたとしたら――

馬鹿な。子供じみている。そう自嘲しても、永瀬は振り返れなかった。

何かがつけてくる嫌な感覚はずっと続き、それはマンションの玄関で突然消えた。躰が軽くなった気がして、永瀬はためらうことなく後ろを振り返った。思ったとおり誰もいない。電車で見掛けた白い影もない。安心の溜め息を吐くと、同じマンションの住人がやってきた。メガネを掛けた太った男で名前は――思い出せない。会釈だけしてエレベーターが来るのを待っていると、さっきまでの感覚が蘇ってきた。斜め後ろにいる男の背後に隠れ、誰かが見ている気がする。永瀬はエレベーターの扉にぼんやりと反射している男の背後を確かめた。そこには何かチラチラと動く白いものがあつた。何かは分からない。光の反射の加減で見えるものなのかもしれない。

だが、多分――

やってきたエレベーターに永瀬は乗り込まなかった。怪訝そうにする男に「具合が悪いんで、どうぞお先に」と言い、男が乗り込むのを見ていた。太った男の背後に隠れ、何かが一緒にエレベーターに乗った気がする。

扉が閉まりエレベーターが上昇すると、永瀬はエレベーターを待つかどうか迷った。が、それは一瞬だった。たかが幻覚のために外の非常階段を使う気にはならなかった。

降りてきたエレベーターの扉が開き、中を覗き込む。案の定、中には何もいなかった。いる訳がない。何がいるというんだ。

そう思ったのも束の間、自分の部屋の前に着くと、永瀬はドアを開けるのをためらった。胸騒ぎ——嫌な予感がしてならない。ドアを開けたら——

自分の臆病虫を一喝し、ドアを開ける。

すぐに電気を点ける。

何もいない。ゆっくりと周りを見渡す。やはり何もいない。

永瀬はホッと、ソファに座ってテレビを点けた。静寂が破られると、永瀬の臆病虫は次第に薄れていった。

テレビでニュースをやっていて、政治家の献金問題や高速道路での玉突き事故、アパート火災などが放送されたが、由香里のことには何も触れていなかった。ということは、まだ発見されていないのかもしれない。永瀬は携帯を取りだし、もう一度メールを送った。

——ドライブに気乗りがしないのなら他のことでもいいけど、とにかく返事をくれよ。

これで今日一日、由香里の死を知らなかったことになる。もう少し経ったなら電話を掛け、返事をよこさない由香里に怒っているようなメッセージを留守電に残そう。そうすればより嫌疑を掛けられなくて済むだろう。

永瀬は頭を抱えた。自己嫌悪に苛まれ、罪悪感に胸が押し潰されそうになる。

こんなことがいつまで続くのだろう。

いつまで耐えられるだろう。

目を閉じる。

死んだ由香里の姿が浮かび上がる。

長い髪を床に広げ、恨みがましい目を向けている。

永瀬は朝から由香里の幻影に悩まされていた。何か後ろからつけてくる気配がして、気の休まる間がない。髭を剃るために鏡を覗き込むと、何か映りそうで真面に見られず、おざなりに済ませてシェーバーのスイッチを切った。家を出ても後ろが気になり、ごくありふれた物音、シャッターの開く音であったり車のドアが閉まる音であったり、そういった些細な物音で躰がビクッと震えた。何でもないことなのに、自ら由香里に結びつけようとしている——そのことが永瀬には分かっていた。何も考えないようにして、ただひたすら前を見て歩く。しかし、ただ歩いているだけでも、思いもよらないことは起きる。駅への道を急いでいると、誰かに背中を押された。前につんのめってそのままバタリと地面に倒れてしまい、手のひらをはたきながら永瀬は後ろを振り返った。誰もいない。前にも後ろにも、手の届く範囲には誰もいなかった。永瀬は背中を押したものの正体が思い浮かび、恐ろしくなった。少し離れたところに制服を着たふたり組の女子高生がいた。転んだ永瀬を見てくすくす笑っている。照れ笑いの一つでも浮かべてその場を立ち去りたかったが、永瀬にそんな余裕はなかった。確かに、何かに背中を押された。でなければこんな真っ平らの舗道で転ぶはずがない。それに何か触れた感触もあった、冷たい何か——。

永瀬は会社においても後ろばかりが気になった。コンピュータにデータを入力していても、後ろを通る同僚たちの足音や、何かを叩く音、切る音、いろんな音が耳に入り、後ろで何が行われているのかを考えると、つつい手元が疎かになった。

「さぼっているのか」と肩を叩かれ、永瀬は心臓発作を起こしそうなほどに驚いた。

声を掛けてきたのは同期入社の人村だった。へらへらと笑っている人村に、ホッとすると同時に腹が立った。

「何か用か？」と、突っ慳貪に言う。

「用ってほどじゃないんだが……折原真理恵さんのことなんだよ。今でも由香里さんと同じ会社にいるんだろ？」

「辞めたって話は聞かないから多分いるんだろうな。折原さんがどうかしたのか？」

「うん、先日、居酒屋で見掛けたんだ。お前と由香里さんが付き合う切っ掛けになったあの店だよ。久しぶりに見たら綺麗になっていて、それで……仲介を頼めないかと思って」

「仲介？」

「前のときはお前たちがくっついたからな、今度は俺の番かなと思って。由香里さんに頼んでくれないかな」

「頼んでみてもいいが、いつになるか分からないぞ」

そんな日はやってこない。永瀬はそう言ってやりたかった。

「そんなに急いじゃないが、まあ、なるべく早く頼むよ」

ポンと肩を叩き、人村は立ち去った。

なるべく早くも何も、由香里はもうこの世にいない。

人村の後ろ姿を見届け、パソコンに向き直ったそのとき、永瀬の背中をゾゾッと冷たいものが走った。突き飛ばされたときの感覚と同じで、氷を持っていた手のひらで撫でられたようだった。何かが後ろにいる。みんなには見えていないだろうが、確かに何かがいる。永瀬は息を殺して恐怖に耐えた。冷や汗を掻きながら耐えていると、背中 of 奇妙な感覚は薄れていった。

永瀬は会社を出て外回りに行きたかった。今は落ち着いているが、アレがいつまた始まるか分からない。何処に行っても由香里がつけてくるのなら、外の方がまだ気が紛れると思った。しかし、午後からは大事な会議が行われることになっていて、外出は叶わなかった。

そして会議でも奇妙なことが起こった。会議室のパソコンを使って永瀬が営業成績を報告していると、ホワイトボードに映された資料が突然消え、パソコンがフリーズしてしまった。再起動も出来なくなり、バックアップのデータを他のパソコンに読み込ませて何とか事なきを得たが、そんなことは初めてだった。お陰で大幅に時間をロスしてしまい、役員たちの輦轡を買ってしまった。会議が終わり、永瀬は壊れたパソコンを調べた。試しに電源を入れてみると、何の問題もなくパソコンは立ち上がり、資料もそのまま保存されていた。あの一瞬だけ壊れたようだ。

仕事の邪魔をし、困らせようとしている。今度は何をするつもりだ？

永瀬は吐き気がして会議室の椅子に座った。大きく息を吸い、呼吸を整える。

「俺をどうしたいんだ？」

中空を見つめ、永瀬は情けない声を発した。口に出してみたものの、由香里が応える訳がない。

が、背後から答えるものがあった。

「出てって欲しいんだけど」

声が由香里に似ていたら永瀬は振り返れなかつたらう。だが、背後からの声は由香里よりずっと年上のものだった。永瀬が振り返ると、会議室のドアのところにふたりの女子社員が立っていた。ひとりにはよく知っている総務部の三島さんだった。もうひとは若く、顔は見知っていたが、名前は知らなかった。

「後片付けですか？」と、永瀬は三島の持つお盆を見て訊いた。役員のお茶を下げに来たようだ。

「ええ、そうだけど。ねえ、さっきの独り言は何？ どうしたいんだ、とか言ってたけど」

「ああ、あれ。何でもありませんよ」

「そうなの……何か変だったわよ」と、三島が不審の目を向ける。

ふたりのやりとりに構わず、もうひとりの女子社員は片付けを始めた。

昔からの癖なんですよと言い、永瀬は精一杯の愛想笑いを浮かべて会議室を出た。

まずい、不審に思われてしまった。

自分のデスクに戻ってしばらく無気力に過ごしていると、受付から呼び出しがあった。まずいときにはまずいことが重なるもので、刑事が訪ねてきたという。ついにこのときが来た。上手くやりすごさなければ身の破滅だ、何が何でもぼろを出す訳にはいかない。

一階の応接室に向かう。中に入り、訪ねてきたふたりの男が身分を告げると、永瀬は訝しげな顔を作ってみせた。これまでの人生において、あなた方と関わり合いになるようなことは一切いたしておりませんが、どういったご用件でしょうか？ とでも言いたげに。

「松尾由香里さんと交際されていたと聞いていますが……」

大浜と名乗った四十過ぎの刑事が訊いた。もうひとりの刑事は酒井といった。

「ええ、それが何か？ 由香里がどうかしたんですか？」

今度は心配顔を作る。刑事の来意を察し、事件に巻き込まれてしまった恋人を案じるように。

「実は……夕べ遅く、由香里さんの遺体が発見されました」

茫然自失の体を装い、永瀬は虚ろな目をした。驚きで言葉をなくしたかのように首を二度、三度振り、信じられないと訴えかける。

「おそらく日曜の五時頃に殺害されたものと思われます。首を絞められていました」

いくら科学捜査が進んだとはいえ、遺体が発見されてから一日も経っていないのに、どうしてそこまで正確な時刻が分かるのだろうか。確かに、由香里を殺害し、マンションを出たのは五時頃だった――。

「そうでしたか……だからメールに返事がなかったんですね」

「そのメール、失礼ですが読ませていただきました。捜査の一環ですのでご了承ください。あの日、永瀬さんは具合が悪くて松尾さんのマンションに行かれなかったようですね」

「ええ。怠くて吐き気もあったものですから……」

穴埋めにドライブに行こうと書いたが、今思うとわざとらしくなかったかもしれない。そのことを訊かれる前に話を変えようと、永瀬は疑問に思っていたことを口にした。

「由香里の死亡時刻は日曜日の五時頃ということですが、こんなに早く詳しい時間が分かるなんてすごいですね」

感心の声で言い、刑事の反応を探る。

「ああ、簡単なことですよ。不審人物の目撃がありましたから」と、事も無げに刑事は言った。

目撃者がいた――。

永瀬は目の前が真っ暗になった。気をつけていたつもりだったが、誰かに不審人物と思われてしまったようだ。

「今日伺ったのは、そのことをお訊きしたかったからなんですよ」

疑われている。メールのことも見透かされているのかもしれない。

「がっしりした体格で、身長は百八十センチくらい、黒っぽいジャケットを着ていたそうですが、心当たりはありませんか？」

百八十センチといえば自分よりも十センチも高い。服も違う。明らかに別人だ、刑事のいう不審人物は自分ではなかった。

「さあ、ありませんね」

深刻な顔で首を捻りながらも、永瀬は心が浮き立つのを感じていた。

「そうですか……」

ふたりの刑事が互いを見やり、残念そうに言う。

そして刑事は、由香里の交友関係で怪しい人物がいなかったかどうかを訊いた。永瀬は知らないと答えた。由香里の過去の男性関係でトラブルがなかったかどうかも訊かれた。それも知らないと答えた。

永瀬が本当に何も知らないと思ったようで、何か思い出されましたらと、年嵩の刑事が名刺を差し出し、暇の挨拶をしようとしたときだった。

「ひっ」

永瀬は思わず悲鳴を上げてしまった。

まただ。また背中を何かが触った。冷たい手のようなものが下から上へと移動していった。さっきは皮膚の表層あたりだったが、今度はもう少し深い部分だった。尾てい骨から大腸を通り、胃から心臓、肩胛骨へと抜けていった。

「どうかなさったんですか？」

刑事が心配そうに永瀬の顔を覗き込む。

「何でもありません」

肩胛骨あたりに冷たさがまだ残っていたが、永瀬は何事もなかったかのように微笑んで見せた。

「ですが、顔色が悪いですよ、真っ青だ」

それは自分でもよく分かっていた。身体中の血液が凍ってしまい、血管を巡っていないように感じられる。

「本当にたいしたことでは……」と言い掛けたところで吐き気が襲ってきた。

永瀬は口元を押さえ、エレベーター横のトイレに駆け込んだ。個室に入り、胃の中のものを便器に吐き出す。胃が痙攣を起こし、苦痛で涙が滲む。最低の気分だ。

「お辛いのいろいろなお訊きだてしまして、申し訳ありませんでした」

トイレの外から刑事の声が聞こえた。恋人の死がショックで変調を来したと思っているようだ。永瀬は返事をしなければ、と思った。しかし、胃痛が酷くて声が出せない。

「またお話を訊くことがあるかもしれませんが……」

永瀬からの返事がないとみると、刑事たちはバタバタと足音を立てた。

「大丈夫ですか？」と呼び掛ける刑事の声が近くなった。刑事は個室の扉の向こうにきていた。扉を軽くノックし、大丈夫ですか、と尚も呼び掛ける。

「大丈夫……です」

永瀬は蚊の鳴くような声で何とか返事をした。少しだけ胃痛が治まってきた。

「会社の人を呼んでみましょうか？」

「それには及びません。もうちょっとじっとしていればよくなりますから」

会社の人間にこんな醜態を晒したくなかった。ただでさえ今日は役員の前で大恥を搔いている。

それではお大事に、と謝辞を述べ、刑事たちは去っていった。トイレの個室にひとり残った永瀬は、胃痛が治まってきたにも拘わらず、涙が溢れて仕方がなかった。

家に帰り着く頃には、胃の不快感はすっかりなくなっていた。それでも体の中を通り抜けた冷たいものの感触は残っていて、思い出すとまた吐きかねなかった。夕飯は何も食わず、永瀬は熱い湯船に浸かった。そうすることで躰の中に残っていた感触を追い出せるかもしれないと思った。風呂から出ると少しは効き目があったのか、いくぶん気持ちが楽になっていた。

中空に目を据え、永瀬は口を開いた。確かめたいことがあった。

「由香里、いるのか？」

何か変化がないかと周りを見渡す。が、部屋の何処にも変化はない。

「いるのなら返事をしろ、俺が分かるように」

永瀬は待った。それでも何も起きなかった。帰ってきたときのままの静寂が辺りを包んでいる。

「返事はしなくてもいいから、不意に襲うのだけはやめてくれないかな？」

もう一度部屋の中を見渡す。やはり何も起きない。

由香里はここにいないのか、それとも拒絶なのか――。

ソファーに座ってテレビを観る。意識をテレビに没頭させ、由香里のことを考えないようにする。それは数分は上手くいく。何も考えないで観たままのことに反応するだけだから、十分や二十分続くこともある。しかし、コマーシャルの間などにふと我に返り、脳裏に由香里の姿がちらつくともう駄目だった。後ろが気になって仕方がない。またあの冷たいものが襲ってくるかもしれないと思うと、恐ろしくて堪らなかった。

携帯が鳴った。

ドキリとさせられ、相手を確認めると、それは折原真理恵からだった。滅多に掛かってこない真理恵からの電話だったが、何の話かはすぐに分かった。真理恵が沈んだ声で話を始めた。

「もう聞いていると思うけど、大変なことになったわね。会社は朝から大騒ぎだったわ。一日仕事にならなくて……永瀬さんは大丈夫だった？」

「うん、何とかね。今日の午後、刑事が来て事件のことを教えてくれたよ。ショックだった」

「分かるわ。私もショックで夕べは眠れなかったもの」

「夕べ？」

刑事は、由香里の遺体が発見されたのは夕べ遅くだと言っていた。真理恵の早すぎる情報収集に驚き、警戒心が湧く。

「そう。私が第一発見者だったのよ。風邪でも引いたのかと思って、様子を見に行ったらあんなことになっていて……びっくりして、何が何だか分からなくなったわ」

第一発見者———そういうことか。考えれば当然の帰結だった。

「本当に驚いただろうね」と、ことさら同情する声で言う。

「あんな姿になって由香里が可哀想だわ。永瀬さんは知らないでしょうけど、ホントに酷い姿だったの。思い出ただけでゾッとするわ」

知ってるよ。そんな姿にしたのはこの僕だ。

「それで……第一発見者だったら警察にいろいろ訊かれたんだらうね？」

永瀬は、真理恵が自分と由香里の関係をどんな風に警察に言ったのかが知りたかった。別れ話をしたのはあのときが初めてだが、別れたがっているかもしれない、などと由香里が真理恵に話していたら疑惑の目を向けられるかもしれない。

「会社でのトラブルとか、由香里の交友関係とか訊かれたわ。だから永瀬さんのことも話したの」

「どんな風に？」

「どんな風になって……由香里から聞いていたとおりのことを話したわよ。近いうちにプロポーズするつもりだったんでしょ？」

体裁を気にしたのか、由香里はふたりが上手くいっているように話していたようだ。そういえば刑事もふたりの関係を疑ってはいなかった。永瀬は、助かったと思った。動機の線がなくなれば疑われることはないだろう。これで心おきなく恋人を殺害された、憐れな男を演じていればいい。

「そのつもりだったよ。一年後くらいには結婚したいと思っていたんだ。けどもう……無理になってしまった」

声を落とし、憐憫を誘うように言う。

「憎いでしょうね、犯人が」

「ああ、憎いよ。赦せない。殺してやりたいくらいだよ」

すらすらと言葉が口を衝いて出てくる。

「私も憎いわ。だから刑事さんに言ってやったのよ、あいつのことを」

「あいつ？」

「あいつよ。由香里から聞いてないの？」

何のことだ、聞いてない。あいつとは誰なんだ？

「聞いたのかもしれないけど、あいつじゃ分からないな」

「あいつはあいつよ、名前が分からないんだもの。由香里につきまとっていたストーカーよ」

ストーカーの話なら聞いたことがある。二週間ほど前だった。誰かにつけられているようで怖いと言っていた。ふたりの関係がぎくしゃくしていたので、永瀬はてっきり由香里が気を引こうとして作った話だと思っていた。

実際にストーカーがいたことに、永瀬は戸惑った。自分の知らない由香里の一面が現れてしまい、どうにかして対処しなければならない。

「ああその話か。だったら知ってるよ。由香里は悩んでいたね。僕も力になってやりたかったんだけど、何処の誰かも分からなかったからどうすることも出来なかったんだ。でも、どうしてそのストーカーが犯人だと思うの？」

「だって……そうに決まってるじゃない。目撃者の話とも一致するし……」

がっしりした百八十センチくらいの男——目撃されたのは由香里のストーカーだった。由香里のマンションを出た直後に、そのストーカーはあの辺りをうろついていたのだろう。何という幸運。私を犯人にしてくださいと向こうから言ってきたようなものだ。

「そのことなら刑事から聞いたよ。そうか、ストーカーの男が犯人か。やっぱり気が動転していたんだね、つい忘れていたよ。そいつのことをもう少し詳しく聞かせくれないかな」

「永瀬さんも由香里から聞いてるんじゃない……」

「いや、僕にもしてない話があるんじゃないかと思って。ほら、由香里は肝心なことを話し忘れていたりするところがあるから」

訝しがる真理恵に間髪を容れず、永瀬は言った。

「詳しくって言われても……確か歳は二十代後半、メガネを掛けていて地味な感じがしたそうよ。でもいわゆるオタクっぽくはなかったみたい。体格がいいからそう思ったのかもしれないけど、髪の毛も短くて色黒で逃げ足も速かったそうだからスポーツマンだったのかもしれないわね、サッカーとかラグビーとか」

「ありがとう。僕が聞いていた話とだいたい同じだったよ」

これからはお互い、犯人に関して知り得た情報を交換していこうということで一致し、電話を切った。携帯をテーブルに置いたあとで仁村のことを思い出した。掛け直そうかと思ったがやめた。仁村がデートをしたがっている——そんな話をしても真理恵には迷惑なだけだろうし、興味を持ってくれるとも思えない。それに、永瀬にしても仁村にかかずにいる余裕はなかった。

明かりを消す前に、永瀬はもう一度由香里の存在を確認した。

「由香里、いるのか？」

返事はない。

明かりを消し、布団に潜り込む。瞳を閉じ、何も考えずに眠ろうと努める。しかしなかなか寝付けなかった。由香里を頭の中から追い払うのは不可能だった。苦痛に歪んだ由香里の顔がいくつも現れては消え、消えては現れる。右から左から飛んできて、永瀬をひと睨みして過ぎ去っていく。

「いるんだろ？」

瞳を閉じたまま永瀬は訊いた。何かの気配を感じ、瞳を開ける勇気がなかった。

「いるなら返事をしてくれないか？」

やはり返事はない。

「声が出せないのか？ だったら分かるように何か物音を立ててくれ」

部屋は静まりかえっていて何の物音もしない。

「物音も立てられないのか。どうすればお前の存在が分かるんだ？」

すると永瀬は胸に痛みを感じた。伸ばした爪の先で突かれている感覚だった。気に入らないことがあったときに由香里がよくやっていた仕草だ。耐えられない痛みではなかったが、指先が肺に達している気がして息苦しい。瞳を閉じているからか、夢の中にいるようで怖くはなかった。

「そうか、痛みか。それが伝達手段という訳だな」

そうよ、とでも言うように胸を突かれ、再び痛みが走る。

「それじゃ訊きたいことがある。教えてくれ、怒っているのか？ イエスなら一回突いてくれ。ノーなら二回だ」

痛みは一回だけだった。

「当然だよな。だけど分かってくれ、本当に殺すつもりじゃなかったんだ。自分でもよく分からないうちにやってしまったんだ。信じてくれるか？」

今度は二回の痛み。

「本当なんだ。由香里を殺したいなんて思ったことは一度もないんだ」

またも二回の痛み。さらに強い痛みだった。

「いや……そうか、隠しきれないみたいだな。本当は途中でやめようとしたんだ。自分が何をやっているのか気がついたからね。だけどやめることが出来なかった。怖かったんだよ。ここでやめたら、きっと由香里はみんなに、殺されそうになったと言いつらさだろうって、そう思ったんだ。危ない人間だと思われたくないからね、ごめんよ、由香里」

永瀬はあまりの痛みで涙を流した。何らかの反応を期待したが、由香里は何も返事をしなかった。

「お願いだから赦してくれないかな？」

二回の痛み。

「どうすれば赦してくれるんだ？」

間があった。そしてまた胸に痛みが走った。それは二回、三回と続き、ついには連打で突かれ、痛みは永続的に続きそうだった。

「やめてくれ！」

永瀬の叫びに、胸の痛みはピタリとやんだ。

「どうあっても赦してくれないのか？」

一回の痛み。

「赦してくれないと僕はどうなるんだ？ 死ぬのか？」

またも一回の痛み。

「やっぱりそういうことか」

永瀬は絶望的になった。それでも最後の気力を奮い起こし、その絶望の淵に手を掛けた。

夢を見ているだけだ。これは脳が見せている幻影、幻覚に過ぎないんだ。

永瀬は会社に電話をして休暇を取った。有給休暇はほとんど使っていなかったし、昨日の今日で課長も永瀬の身を案じてくれ、同情の声で許可してくれた。

午前中は何もせず、ただぼんやりと過ごした。午後になって永瀬は出掛けた。相変わらず後ろが気になった。何かがつけてきている——そんな気がしてならない。小さな物音がしても、何か永瀬を振り返らそうとしていると思えてならなかった。考えすぎだと思っても、怖くて後ろを確かめることが出来ない。そこに由香里を見てしまったら、夢ではなくなってしまう。

警察署に行き、大浜刑事を呼び出してもらおう。大浜刑事はいた。大浜刑事はこれから出掛けるところだったらしいが、永瀬を小さな会議室のような部屋に微笑んで案内した。テーブル越しに向かい合い、ふたりは座った。刑事との再対面に緊張するかと思っていたが、永瀬は自分でも驚くほど冷静だった。

「わざわざ来てくださってありがとうございます。昨日はお身体の優れない中を押しかけまして申し訳ありませんでした。それで……今日はどういったことで？」

「思い出したことがあったんですよ。昨日は、思い当たる人物は誰もいないと言いましたが、あいつが犯人じゃないかと思ひまして……」

「ほう。犯人に心当たりが」

「と言ひましても、何処の誰かは知らないんですけどね。由香里にはストーカーがいたんです」

「ああ、ストーカーの話なら他の人からも聞いています。我々もその線で動いているところです」

狙いどおりになってきた、と永瀬は思った。すでに警察が知っているストーカーの話をしたのはふたつの意味合いがあった。一つは、真理恵が知っているのに恋人の永瀬がストーカーの存在を知らないのは不自然に思われるから。そしてもう一つは、もっともらしい嘘を吐き、ストーカー犯人説をより強固にするため――。

「何だ、ご存じだったんですか。それじゃ来た意味がなかったですね」

照れ笑いを浮かべ、永瀬は言った。

「いえいえ、我々の知らない部分もあるでしょうから、是非お聞かせください」

警察にストーカーの話をしたのは真理恵だ。真理恵から聞いた話をすれば間違いない。

「お役に立てればいいんですが……それでは。見た目は事件の直後に目撃されているとおり、がっしりした体格で、身長は百八十センチくらい。歳は二十代後半でメガネを掛けていたそうです。色黒で髪は短く……ひと言で言うとスポーツマンタイプだったようですね」

これで自分の話に信憑性が増すだろうと永瀬は思った。ここからは永瀬が考えた話だった。ストーカーに罪をなすりつけるための話――。

「由香里は毎日怯えていました。見ていて気の毒なくらいで、僕は何とかしたかったんですが、相手の男が何処の誰かも分からなくてどうしようもありませんでした。ある日、由香里の郵便受けに脅迫文が入っていました。ストーカーからでした。裏切り者の由香里を殺してやると書いてありました。どうせただの悪戯だと思って無視したんです。まさか本気だったなんて……僕が馬鹿だったんです。もっと注意していれば由香里を守れたかもしれないのに。気味が悪いからとその脅迫文は由香里が棄てました」

永瀬は感情が高ぶり、自分の言葉に酔っていた。涙を流せば完璧だと思ったが、そこまでの演技力はなかった。それでも、俯いて唇を噛み、憤怒に耐えない表情だけは作ることが出来た。

ストーカーに殺意があったことを伝えられたのは上出来だった。これで警察は、頭のおかしな奴が由香里を殺したとの心証を強くするだろう。

「本当にその脅迫文には殺してやると書いてあったんですか？」と、刑事が念を押して訊く。

「ええ。確かにこの目で見ました」

「ううん」と唸り、大浜刑事が腕組みをして椅子の背もたれに身を預け、不審の顔をしている。

何か余計なことを言ったのだろうか、と永瀬は不安になった。真理恵から聞いた話をそのままただけでおかしな点はなかったはずだし、付け加えた話にしても、誰も知りようのない話だった。いったい何に刑事は疑問を抱いているのだろうか。

「ちょっと失礼します」と言って、大浜刑事は部屋を出て行った。

永瀬の不安は大きくなるばかりだった。何かミスをしてしまったようだが、考えられるのはストーカーからの脅迫文の話しかなかった。しかし、検証のしようのない話をどうして不審に思うのか、永瀬はいくら考えても分からなかった。

がちゃりとドアが開き、大浜刑事が戻ってきた。手に紙を持っている。永瀬はチラリと横目で見たが、それが何かは分からなかった。その紙を大浜刑事はテーブルの上に置いた。

「ここに松尾由香里さんから被疑者不詳で提出された被害届があります。ストーカーの被害届です。ご存じでしたか？」

「いえ」

由香里は警察にストーカーの相談に行っていた——。寝耳に水で、知っていたと嘘を吐くことは出来なかった。嘘を吐けばさらに取り返しのつかない事態に発展しそうだった。

「これには……駅からの帰りをつけられたり、マンションの周りをうろつかれたりして怖い思いをしていると書かれています。脅迫文の話は載ってないのですが、それはどうしてです？」

「由香里が忘れていたんでしょう」

つまらない言い訳が出てしまった。動揺を抑えきれない。

「そんな大事なことをですか？」と、刑事が不審の声を上げる。

「あいつはそんなところがあったんです。肝心なことを忘れてしまうんですよ。おっちょこちょいでして、夕飯の食材を買い忘れることもしょっちゅうでした」

可笑しいでしょう、と誘い笑いを浮かべたが、刑事は真顔のままだった。

「食材を買い忘れるのとはレベルが違うと思いますが、そうですか……そう仰るのでしたらそうなのかもしれませんね」

危機は脱したのだろうか。

よく分からないが、疑惑が完全に払拭されていないことは分かった。

「ですが……」と、大浜刑事が話を続けた。

「私が得た情報では、松尾由香里さんはお友達の誰にも脅迫文の話はしていないんですよ。ストーカーの話をしている人は何人かいましたが、その中の誰にも脅迫文の話をしないというのは変ですよ。しかも殺してやると書かれていたんですから大騒ぎになってもおかしくないでしょう。由香里さんはどうして他の人に脅迫文のことを言わなかったんでしょうか？」

「それは……」

もう駄目かもしれない——と、永瀬は思った。ストーカーに罪を着せようとする魂胆を見透かされている気がする。

「ああ、そういえば由香里には見せなかったかもしれないな……。そうだ、見せなかったんだ、由香里が怖がると思って。僕が先に脅迫文を見つけたんですよ。郵便物の中に変なものが混じってましたからすぐに分かりました。A4のコピー用紙にワープロで書かれていました。太い文字です。棄てたのも僕です。マンションの入り口のゴミ捨て場に丸めて棄てました。済みません刑事さん、僕の勘違いでした」

苦しい言い訳に、刑事は明らかに疑問を持っていた。

「本当に勘違いですか？」

「そうです、勘違いです。ですが、脅迫文のことは本当です。由香里を殺してやると書いてありました。頭のおかしな変質者なんでしょうね。刑事さん、早いところ捕まえてくださいよ。そいつは僕のことにも殺すに決まっています。殺されたくない。刑事さん、僕を助けてください。お願いしますよ。ああ、僕は死にたくない」

さっきは出なかった涙が、今は溢れ出していた。演技ではなかった。永瀬は心底恐れていた。由香里のストーカーではなく、由香里の存在を。

自分に疑惑の目が向けられ始めたのを永瀬は意識していたが、夜のニュースでは、警察は今のところはまだ目撃された不審者の洗い出しに全力を傾けているとのことだった。由香里のストーカーの話もでていて、その特徴が具体的に告げられ、不審者とストーカーを同一視する見解がなされた。しかし永瀬は、自分の情報がまだ漏れていないだけで、早晩、怪しげな言動をした被害者の恋人がマスコミの俎上に登るのは間違いないだろう、と予見した。

テレビのニュースを観ながら、永瀬は大きな溜め息を吐き、中空に目をやった。

「お前が警察に相談に行っていたなんて知らなかったよ。教えてくれればいいのに……全く、とんだへまをやっちまったよ」

自嘲の笑みを漏らし、中空に話し掛ける。

「本当はこの部屋にはいないんだろ？ そんなことは分かっているんだ。じゃあ、誰に話しているかって？ 僕だよ。僕自身に話しているんだよ。お前が現実には存在しないのは分かっているんだ。お前がいるのは僕の脳の中だ、そうだろ？ 本当にいるのなら姿を見せてみろよ」

すると、永瀬が自分の右手が痺れてくるのを感じた。そこにあるのは分かっているのに、自分の躰から切り離されてしまったような感覚だった。左手で触れてみると、氷のように冷たかった。つねっても引っ搔いても、痛くもかゆくもない。それでも右手は動いた、永瀬の意志とは関係なく。

何も感じない右手がリモコンを掴み、テレビの電源を落とした。リモコンをテーブルに戻すと、右手は人差し指を突き出し、テーブルをなぞり始めた。その滑らかな動きは文字を書いていた。

ひきょうもの。右手の軌跡はそう読めた。

「僕が卑怯者だって言うのか？」

右手がテーブルから離れ、人差し指が永瀬の胸を一回だけ突く。

「僕が何をしたって言うんだ？」

人差し指が再びテーブルをなぞる。

なすりつけ――

「お前が知るはずがないじゃないか。それとも、お前も警察署にいたって言うのか？」

人差し指が、そっぴら、と胸を突く。

「そんなはずがない。お前が知っているんじゃないで僕が知っているんだ。お前は何も知っちゃいない。これは幻覚だ。僕の脳が僕に見せているだけだ。僕は信じないぞ」

人差し指は永瀬の胸を二回突き、そのあと何度も激しく突いた。左手で押さえようとしても、左手までもが永瀬の意志どおりには動かなくなってしまう、勝手に動いている。右手、左手がシソクロして内側に振られる。両腕ともにバラバラになりそうので、永瀬は激痛に気を失いかねなかった。

「分かった。信じるからやめてくれ」

永瀬の言葉に、両腕が元に戻り、自由がきくようになった。

痛みを振り払うように腕を揺らしていると、冷たいものが背中を通り抜けた。途端に永瀬は吐き気を覚えた。呼吸が苦しくなり、涙が溢れる。

「今度は何だ？ 俺に何をさせたいんだ？」

躰の中を冷たいものが何度も通り過ぎる。

「分からないよ。何をすればいいんだ？」

また右手が痺れ、テーブルに文字を書いた。

けいさつつけ。

「分かったよ。警察に行けばいいんだな。行って本当のことを話すよ。それでいいんだろ？」

人差し指が一回胸を突く。

永瀬は観念した。もう自分ではどうにも出来ないと思った。たとえ脳が見せている幻影だとしても、このままでは確実におかしくなってしまう――。

次の日も会社を休んだ。課長に嫌みを言われたが、そんなものは由香里の恐怖に較べれば何でもなかった。会社へ連絡したあと、部屋でぼんやりしていると仁村から電話か掛かってきた。あまり話したい気分ではなかったし、仁村が例の話を催促しそうで出たくなかった。だが、おそらく由香里の死を悼んで掛けてきたのだろうから出ない訳にもいかなかった。

永瀬が電話に出ると、仁村はいつものざっくばらんな物言いではなく、常識的にお悔やみを述べた。そして真理恵とのことは話題にせず、意外なことを口にした。

「由香里さんの部屋に花をお供えしたいんだが、一緒に行ってくれないかな？ お前が一緒だと入れてくれるだろうから」

仁村の申し出に、永瀬は違和感を持った。

「由香里は喜ぶだろうが、仁村がそこまですることはないだろう」

「いや、やってあげたいんだ。会社、休んだようだし、時間はあるんだろ？」

「まあ、あるといえばあるが……」

行きたくない。あの部屋には二度と行きたくない。

「取引先との打ち合わせがあるから……そうだな、三十分後に」

強引に話を進められ、由香里のマンションの最寄り駅で待ち合わせることになった。永瀬は激しく後悔した。由香里の牙城とも言えるあの部屋へ行ったら、どうなるか分かったものではない。

駅には先に仁村が来ていた。手にしっかりと花束を持っている。永瀬も駅の近くの花屋に買いに行くと、その道すがら交番が目に入った。由香里との約束が頭をよぎる。警官にじっと見つめられ、永瀬は目を逸らした。胸中で由香里に言い訳をする。

由香里のマンションからの帰りにあの交番に出頭するよ、それでいいだろ？

花束を持ったふたりの男が通りを歩く。それは何かのイベントのようで珍妙だった。

仁村が、課長の機嫌が悪かったとか、取引先が頑固で困るとか、そんなどうでもいい話をする。そんな話を聞き流しながら、永瀬は仁村の肩の高さが気になっていた。それまであまり気にしたことなかったのに、改めて見ると、自分よりも十センチくらい高い。髪も短い方だし、色も白くはない。だが、仁村はメガネを掛けていなかった。コンタクトをしている。

「仁村、メガネを掛けることはあるのか？」と、何の脈絡もなく訊く。

「休みの日は大抵メガネだが、それがどうかしたのか？」

「いや、何でもない」

仁村が由香里のストーカーだろうか。外見的には一致するし、有り得ない話ではない。由香里と交際することになった際、仁村は、羨ましい、と何度も口にしたりした。由香里の趣味を訊かれたこともあったし、真理恵のことにしても、由香里とさらに親密になりたいがための方便だったのかもしれない。そもそも、この訪問自体がおかしい。ただの厚意なのかもしれないが、何か裏がある気がする。仁村がストーカーだとしたら、あの日、マンションから出て行ったところを見られたかもしれない。仁村は犯人を知っているのかもしれない。知った上で由香里の部屋に誘っている——目的は一つしかない。由香里を殺した犯人の殺害だ。

由香里のマンションに着き、管理人に事情を話して部屋の鍵を開けてもらう。

閉め切った部屋は空気が淀んでいた。窓を開け、空気を入れ換える。用心して仁村の様子を窺っていると、仁村はシンクで花束を一つにまとめ、花瓶に挿していた。

テーブルに花瓶を置き、合掌する。永瀬も慌てて後続く。何か由香里の反応があるかと思ったが何もなかった。胸を指で突く痛みもなければ、躰を突き抜ける冷気もない。吐き気もない。由香里は大人しくしている。

「さてと……」

合掌を終え、仁村がにやりと笑った。企みを持った顔だ。いよいよ本性を現すのか——。

永瀬は身構えた。

「実は……このためだけに来たんじゃないんだ」

「というのは？」

「由香里さんから聞いてないかな？」

お前がストーカーかもしれないということを、か。

「何のことだ、聞いてないと思うが……」

「由香里さんもしょうがないな」と、仁村が不快そうに言う。

永瀬は台所の方へ躰をずらした。いざとなったら武器がいる。

仁村は何かぶつぶつ言いながら、由香里の本棚に目を移した。本棚には文庫本とCD、DVDが雑然と並べられている。その中の一つに手を伸ばし、仁村がまたもにやりとした。

「これこれ。懐かしの再会だな」

仁村が手に取ったのはDVDだった。厚さが五センチくらいのBOXもので、ひとつのパッケージを開け、中を調べている。

「勝手に何をしてるんだ？」

仁村の行動は怪しかった。わざと永瀬に背中を向けて隠しながら、急いで中から何かを取り出したように見えた。

あの中に隠しておけるもの、見られたくないもの——盗聴器だ。

「何をって……このDVDは俺が由香里さんに貸していたものなんだよ。もう返ってこないと諦めていたんだが、やっぱり返して欲しいからな」

「嘘を吐け。何かを隠しただろ」

「何も隠しちゃいない。壊れていないか調べていただけだ。限定品で、貴重なんだぞ、これ。お前は知らないだろうけど、七十年代にイギリスで人気のあったロックバンドのライブDVDなんだ」

「そんなものをどうして由香里が借りるんだ？」

「彼女も古いロックが好きだったんだよ。何かのときに話したら、貸して欲しいって言われて…
…本当は貸したくなかったんだ。彼女は忘れっぽいからな。案の定、返ってこなくて、取り返すなら今しかないと思ったんだよ」

「取り返したのは盗聴器だろ。見てたんだぞ、何かを隠したじゃないか」

「盗聴器？ 馬鹿馬鹿しい」と、仁村が鼻で笑う。

「だったら鞆を開けて見せろよ」

「何だよ、まるで犯人扱いだな」

渋々といった体で仁村が鞆を開ける。中に入っていたもの——打ち合わせの資料や、週刊誌などがテーブルに並べられ、仁村が鞆をひっくり返して底をぽんぽんと叩き、中に何も入っていないことをアピールする。

「鞆をよこせ」

仁村が放り投げた空の鞆を受け取り、永瀬は鞆の隅々まで調べた。——何も出てこなかった。

「気が済んだか？」

「背広のポケットだ、後ろを向け」

「いい加減にしないか、いくらお前でも怒るぞ」

呆れ果てる仁村を睨み付け、永瀬は台所に走った。包丁を手に戻ってくる。

「おかしいぞ、お前。そんなものまで持ち出して……」

「おかしいかどうかはお前の対応次第だ。さあ、後ろを向け」

不機嫌な顔で仁村が両手を広げ、背中を向ける。

永瀬は背広のポケット、ズボンのポケットを上から叩いて調べた。気になるものはない。残っているのは背広の内ポケットだけになった。

「脱げ」

永瀬の言葉に、仁村はますます苦虫を噛み潰したような顔をした。永瀬の持つ包丁に視線を向けながら、ゆっくりと上着を脱ぐ。

永瀬は内ポケットに手を突っ込んだ。硬い感触があった。カード型電卓のような薄い機械が中から出てきた。

「これは何だ？」

「お前が思っていたとおりのものだよ。盗聴器だ。出し抜いて誤魔化せると思ったが、意外とお前は目聡いな、しくじったよ」

半笑いの顔で、仁村が開き直って言う。

「こんなものを仕掛けて……由香里の動向を調べていたって訳か」

「そんな大袈裟なものじゃない。話を聴いていただけだ。俺はただの盗聴マニアだよ」

「盗聴マニア？ それだけじゃないだろ。お前はストーカーじゃないか」

チラチラと包丁の刃を見せる。

「違う。ニュースでそんな話が出たからやばいと思ったんだ。部屋を調べられてこれが見つかったら、俺が犯人になってしまうかもしれないからな、だから早く取り返したかったんだ」

話を聞いていて、永瀬は気になった。あの日も仁村は盗聴していたのだろうか。していたのなら、全てを知られていることになる。だが、知っているような様子を見せない。まだ何か隠しているのだろうか。

「由香里が殺された日も盗聴していたのか？」

「まあ、そのつもりだったけどね」

「そのつもり？」

「邪魔が入ったんだ。よく聞こえるポイントを探していたら、警官が現れて、職務質問されそうだったから走って逃げた。あのときほど陸上の選手をやっててよかったと思ったことはないよ」

目撃された不審者は仁村に間違いない。そして、仁村はあのときの、由香里の部屋の様子を聴いていない。真相を知ってはいない。ならば——仁村を犯人に仕立てるしかない。

「そんな話を誰が信じてくれると思う？ これを警察に持って行けば事件は解決だ。お前が由香里のストーカーであり、由香里を殺した犯人だ」

「待ってくれ。違う。本当に違うんだ。俺じゃない」

「僕を出し抜けるなんて考えたのが浅はかだったな」

永瀬がカード型の盗聴器を胸ポケットにしまおうとすると、例の冷たいものが背中を走った。「ううっ」と呻き声を上げ、永瀬はしゃがみ込んだ。内臓が全て凍り付いたようだった。

「どうしたんだ？ 大丈夫か？」

仁村が呼び掛けるが、永瀬は返事が出来ない。

「とにかく……」と言い、仁村が手を伸ばす。

「これは返してもらわないとな」

仁村は永瀬の手の中にあつた盗聴器を奪った。

「俺のことは誰にも言わない方がいいぞ。お前たちの仲がおかしくなっていたのは知っていたんだ、盗聴していたからな。あの日誰かが不意に由香里さんの部屋を訪ねた。あれはお前だったんじゃないか？ 由香里さんを殺したのだからお前じゃないのか？」

仁村の声がどんどん遠くなった。呼吸が苦しくて、永瀬は床に転がった。

「なあ、本当に大丈夫か？ 救急車を呼んでやろうか？」

永瀬は首を振った。これは幻覚だ、時期に直る。

「それならまあ、いいが……じゃあ、これで俺は行くよ。取引先に遅れてはまずいからな」

仁村が出て行き、ガチャリと扉が閉まった。すると、それまで永瀬をいたぶっていた冷たいものが、永瀬の躰の中から去っていった。呼吸が楽になり、永瀬は大きく息を吸った。気がつかないままに流していた涙を拭く。

永瀬は疲れ切った目を中空に向けた。

「証拠を取られたじゃないか、由香里。どうしてこんなときに邪魔をするんだ？ あいつがストーカーじゃないか、なんだったって逃がしたんだ？」

答えが返ってくる訳はなく、永瀬は疲れ切った目を扉に向けた。

「そうか、そうだよな、出頭しなきゃいけないんだったな」

軽くなった躰を起し、永瀬は扉に向かった。力のない足取りで駅の交番を目指す。

やがて駅に近づき、交番にさっきの警官の姿が遠目にも認められた。お婆ちゃんとにこやかに話をしている。道でも訊いていたのか、話が終わり、お婆ちゃんが去っていくと、警官が永瀬の方に目を向けた。途端に警官は厳しい顔をした。永瀬はたじろいだ。すでに大浜刑事から連絡が回っていて、自分を探していると思った。逮捕される——と思うと、永瀬の足は止まった。

やっぱり無理だ。捕まりたくない。

踵を返し、永瀬はその場を立ち去った。通りを来た方へと引き返す。

由香里との約束を破ってしまった。今度こそ殺される。

恐ろしかった。だがその一方で、幻覚に殺されるわけがないじゃないか、との思いもあった。ただの幻覚で死ぬわけがない——。

気配がした。

嫌な気配。何かが後ろからつけてくる感覚があった。

気のせいだ。たとえそこに由香里がいたとしても、それは由香里の幻影に過ぎない。

永瀬は意を決して振り返った。

そこにいたのは交番の警官だった。警官を見て引き返した自分を不審者だと思ったようだ。警官が職務質問をしようとさらに近づいてくる。

話をしてはならない。したら最後、全てを喋ってしまいそうだ。何かに後ろからつけられているような感覚があったことも、内蔵が凍りそうだったことも、胸の痛みで由香里と会話したことも。

永瀬は歩みを早めた。警官も歩みを早めたのが分かり、永瀬は素早く路地に入り、駆け出した。細い路地を右に左にひたすら走る。後ろは振り返らない。ただ走る先だけを見つめ、何も考えない。日頃の運動不足のせいで息が切れてきた。しかし、スピードを落とすことは許されなかった。相手は追跡のプロ、気を抜いたら追いつかれてしまい、即、逮捕されてしまう。

走り続けていると、いつの間にか由香里のマンションの前に来ていた。無我夢中で適当に走ったのにここへ戻ってきてしまい、永瀬は薄ら寒さを感じた。

罰を与えるから部屋へ来い——ということか。

もう逃げられないと思い、永瀬は由香里の部屋へ向かった。

一縷の望みで、管理人が施錠してくれたかもしれないと願ったが、それは叶わなかった。管理人に、終わったとの報告を忘れていたし、それにたとえ鍵が掛かっていたとしても、由香里ならすぐに開けてしまうだろう。

戻ってきてしまった。

これから何が始まるのか——と思うや否や、永瀬の背中を冷たいものが突き抜けた。それは今まで以上に鋭くて、内蔵はおろか、全身に及び、永瀬は床を転げ回り、すぐに気を失いかけた。すると由香里の攻撃はやみ、永瀬が息を吹き返すと攻撃がまた始まった。そんな状況が繰り返され、たとえ幻覚であったとしても死んでしまいそうだ、と永瀬は薄れ行く意識の中で思った。

憐れに思ってくれたのか、由香里の攻撃が弱まった。

「助けてくれ……頼むよ、赦してくれ」

ここぞとばかりに永瀬は哀願した。

胸に痛みが走った。——一回。

赦してくれた——そう思い、歓喜の声を上げようとしたとき、痛みがもう一回あった。

「僕をもてあそんでいるのか？」

一回の痛み。

「どうあっても赦してくれないのか？」

またも一回の痛み。

永瀬は絶望した。幻覚にしろ何にしろ、このまま由香里にいたぶられて死んでいくだけだ。

そのとき、扉を開ける音がして永瀬は視線を向けた。逆光が眩しかったが、目を細めて見ると、そこに立っていたのは先ほどの警官だった。

「助けてください！ 殺される！」

叫び声を上げる永瀬を慈愛に満ちた目で見つめ、警官がゆっくりと近づいてくる。

「話を訊きたかっただけなのに逃げることはないでしょう、永瀬さん」

「済みません。逃げた訳じゃないんです」

永瀬は、警官が自分の名前を知っていたことが不思議だった。それに、助けを求めているのに、やけに落ち着いていて、転がっている永瀬を起こそうともしないことが解せなかった。

「あなたは酷い人だ。恋人を殺した上に、別人を犯人にしようとした」

やはり大浜刑事から連絡が行ったのだろう。永瀬は逮捕されることに安堵した。こんな幻覚に悩まされるくらいなら刑務所にいる方がましだ。

だが——もう一つ解せないことがあった。この警官はどうして応援を呼ばないのだろう。逮捕するつもりなら、話を訊きたかっただけだというのも変だ。

警官が起こしてくれそうにないので、永瀬は自力で起き上がろうとした。

「まだ寝てな」と吐き捨て、警官は永瀬の胸を踏みつけた。

「な、何をするんだ！」

永瀬は驚き、警官の足を払いのけようとしたが、すればするほど警官が憎々しげに足を踏み下ろす。暴力警官だ。逮捕するにしても行き過ぎた行為だ。永瀬は下から警官を睨み付けた。警官も憎悪の顔で睨み返す。

「お前のせいでな、由香里さんは死んでしまったんだ……」

突然、警官の顔が歪み、涙を流し始めた。永瀬から足を離し、床にへたり込む。ついにはオイオイと泣き始めた。何かおかしい。永瀬は半身を起し、泣き続けている警官を観察した。メガネを掛けていて短髪、色黒、身長も多分、百八十くらいだろう。

「あんたが由香里のストーカーだったのか……」

警官は泣きやみ、涙に濡れた顔を永瀬に向けた。ニヤッと笑ってみせる。

「駅前の交番に赴任してきた半年前からだよ。一目見て好きになった。彼女の全てが知りたかった、昼間の彼女も夜の彼女もね。彼女のことを調べるのに警官というのは都合がよくてね、勤めている会社も実家も、知りたいことは何でも分かった。知りたくないことまで分かってしまったけどね。もっとも、調べなくとも、ふたりが一緒にいるところを見掛けるようになったから、恋人の存在はすぐに分かった。がっかりしたけど、逆にファイトも出てきた。たいした男じゃないからすぐに振られるだろうと思ったんだ。ところがそうはならなかった。私は何とかしてあなたを排除しなければ、と思った。あの日も駅前で見掛けて、つけていった。職質をかけて何かのあらを探そうと考えていたんだが、妙な男がいて、そっちに気を取られていたらあなたは帰ったあとだった。ずっと部屋の電気が点かないから変だとは思ったんだが、まさか殺されていたとは……。

警官が一瞬、恨みがましい目を永瀬に向ける。

「殺されていたと知って犯人はすぐに分かった。だが、ストーカーの話がすぐに出てしまい、私はあなたのことを言えなくなってしまった。何故そんなことが分かるのかと訊かれても返答できないからね。密告してもよかったんだが、由香里さんを殺した男にはこの際、この世から消えてもらおうと思ってね、この機会を待ってたんだ。思いの外早くやってきたよ」

「消えてもらうって……僕を殺すのか？」

「当然だろ、それだけのことをやったんだから。報いを受けるんだよ、由香里さんからの報いを」

「それならとっくに受けているよ」と溜め息混じりで言い、永瀬は薄い笑みを見せた。

「とっくに受けてる？ 何のことだ？」

「あんたが来たときも報いを受けていたんだ。躰が凍って、息が出来なくて……」

真顔が崩れ、警官は破顔した。

「由香里さんの亡霊でも出たって言うのか？ くだらない。由香里さんからの報いっていうのは言葉のアヤだ、俺が殺したいんだよ」

そう言うと警官はすっと立ち上がり、腰の拳銃を抜いた。銃口を永瀬に向ける。

永瀬は目を丸くした。警官が本気だったことにも驚いたが、何より、死がこんなにも安易に訪れることに驚いた。

「そんなもので撃ったら、あんたも殺人犯じゃないか」

「殺人は犯すが殺人犯じゃない。私は警官だからな、お前が死ねば話はどうにでも作れる。挙動不審者を追いかけていたら銃を奪われそうになって暴発したとか、武器で襲いかかってきたとか、何かしらの理由付けは出来るもんだよ。まあ、始末書くらいは書かされるだろうが……」

永瀬はもう助からないと観念した。この警官が銃を撃ち損じることはないだろうし、仮に気が変わって部屋を出て行ったとしても、由香里に絶命するまでいたぶられるだろう。静かに目を閉じる。銃で額を撃ち抜かれた方がましだった。苦痛を感じる間もなく、一瞬のうちにケリをつけて欲しかった。おそらくこの警官は上手くやってのけ、ストーカーだったことを気取られることもなく、これから先、立派な警官として生きていくのだろう。湧き上がってくる恐怖と戦い、永瀬は心を落ち着けてそのときを待った。轟音が響くのと同時に、自分の命は終わってしまう――

。

待った。待ったが、そのときはなかなかやってこなかった。警官が何か呻いている。苦しげな声を出している。事態は急変したようだ。永瀬は目を開けた。すると、永瀬に向けられていた銃口が、今は警官に向けられている。警官は必死に、銃を持つ右手を左手で押さえている。状況が飲み込め、永瀬は滑稽に思えた。

「あなたもどうやら由香里の報いを受けるようですね」

永瀬の声に、警官が救いの目を向けた。

「何なんだ、これ。どうなってるんだ？」と、怯えた声で訊く。

「由香里の仕業ですよ。由香里の報い――あなたがそう言ったじゃないですか」

「そんなことがあるはずがない。彼女は死んだんだ！」

恐怖を紛らわそうと警官が大きな声を上げる。

「死んだからこそじゃないですか。他に説明がつきますか？ これは幻覚なんかじゃないんです。現実には起こっていることなんです」

「そんなことは言われなくても分かっている。ぼうっとしてないで手伝ってくれ。この手を引き離してくれ」

警官の引き攣った顔を見ていて永瀬は思った。

由香里が助けてくれた。僕を赦してくれた——。

死を覚悟した永瀬の胸中に、再び生への執着心が渦巻いた。

「だから言ったでしょ。由香里はここにいるんですよ。なあ、由香里」

永瀬が中空に向かって呼び掛けると、警官も辺りをぐるりと見渡した。

銃口がピタリと頭につき、警官の躰は固まってしまった。

「何処にいるのか分からないが、何だっていい、どうすれば助かるんだ。早く何とかしてくれよ」

「僕にはどうにも出来ませんよ、由香里の気持ち次第ですから。そうだよな、由香里」

「そんなことを言わないでくれ。頼むから何とかしてくれよ。私はただのストーカーじゃないか。殺したのはこの男だ、私を殺すことはないだろう。お願いだ……」

ついに銃口が火を噴き、警官の言葉は途切れた。頭から血を流し、警官の躰が永瀬の目の前にどさりと崩れ落ちる。轟音の残響と火薬の臭いが部屋に充満した。

「ありがとう、由香里。全ては終わったんだね」

ホッとした永瀬は、警官の死体と向き合った。それはどう見ても自殺にしか見えなかった。ストーカーだった警官が好意を寄せていた女性を殺害し、その罪を償うために自殺した、そういう筋書きになってくれればいいのだが——。

そのためには、ここにいるのを誰かに見られてはやっかいなことになると思い、永瀬は扉に向かいかけた。その目の端に動くものが映った。死んだはずの警官の右手がゆっくりと上がり、銃口が永瀬に向けられる。

幻覚で死ぬことはない——そう思いながら、永瀬は二度目の銃声を聞いた。